

見て、知って、変わる



人と動物の未来のために



アジア・アフリカに生きる

大型類人猿を支援する集い

SAGA27

2025年11月29日(土)

10:25~17:30

@ 中央大学後楽園キャンパス (東京)

SAGA27 発表要旨集

会場：中央大学後楽園キャンパス 5号館

後楽園キャンパス



(会場の5号館は左上の建物です)

アクセス

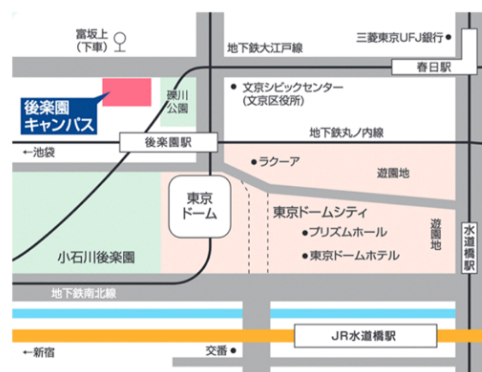
中央大学 後楽園キャンパス

〒112-8551 東京都文京区春日1-13-27

TEL : 03-3817-1711

- ・東京メトロ丸ノ内線・南北線『後楽園駅』から徒歩約5分
- ・都営三田線・大江戸線『春日駅』から徒歩約6分
- ・JR中央・総武線『水道橋駅』から徒歩約12分
- ・JR中央・総武線『飯田橋駅』から徒歩約17分

※春日通り沿いに正門、東門があります。



2025 年 11 月 29 日（土） 10：25～17：30

プログラム

10:00 開場（中央大学後楽園キャンパス 5 号館 5 階 大講義室）

10:25-10:30 開会のあいさつ・司会 徳山奈帆子（中央大学理工学部生命科学科）
シンポジウム テーマ「見て、知って、変わる：人と動物の未来のために」

10:30-11:00 動物園から社会を変える
村田浩一（日本動物園水族館協会/よこはま動物園ズーラシア）

11:00-11:30 シエラレオネのチンパンジーサンクチュアリ：動物の「幸せ」は誰が決める？
樺澤麻美（京都大学アフリカ地域研究資料センター）*シエラレオネからの遠隔講演

11:30-12:00 みんなちがうからこそ考える、動物福祉への配慮のかたち
山梨裕美（京都市動物園 生き物・学び・研究センター）

12:00-13:00 休憩（会場内でのお弁当等の飲食も可能です）

13:00-13:30 ネイチャーポジティブ時代の霊長類研究・動物園の役割
深野祐也（千葉大学大学院 園芸学研究院）

13:30-14:00 マハレにおけるチンパンジー研究と〈エコ〉ツーリズム
中村美知夫（京都大学大学院 理学研究科）

14:00-14:30 ボノボとの出会いは保全意識を育むか？：保護区内外の中高生への調査から
徳山奈帆子（中央大学 理工学部生命科学科）

14:30-15:00 総合討論

ポスター発表（中央大学後楽園キャンパス 5 号館 3 階）

15:30-16:30 奇数番号ポスター コアタイム

16:30-17:30 偶数番号ポスター コアタイム

シンポジウム講演要旨

テーマ「見て、知って、変わる：人と動物の未来のために」

場所：中央大学後楽園キャンパス 5 号館 5 階 大講義室

「動物園から社会を変える」

村田浩一（日本動物園水族館協会/よこはま動物園ズーラシア）

動物園の役割について最近よく考える。従来はレクリエーション、種保全、調査研究、環境教育の4つが提唱されてきたが、地球環境や生物多様性の危機が深まる今、保全への貢献がより重要視されている。その中でレクリエーションの意義は軽視されがちだが、都市の中で緑が溢れる動物園は、飼育下動物のみならず来園者の心身を癒し脱炭素にも寄与する。生態系の大切さを楽しみながら学び、ヒトが動物の一種として持続可能に生きる社会へと変革をリードする存在として、動物園の新たな価値を追求したい。

「シエラレオネのチンパンジーサンクチュアリ：動物の「幸せ」は誰が決める？」

樺澤麻美（京都大学アフリカ地域研究資料センター）*シエラレオネから遠隔講演

西アフリカのシエラレオネにあるタクガマ・チンパンジー・サンクチュアリは今年で設立 30 年を迎え、現在 119 個体のチンパンジーを飼育している。そこには、チンパンジーの日々の世話をする現地の人々、欧米からの運営陣・ボランティアといった、異なる動機や動物に対する価値観・理想像を抱く人たちが集まっている。本講演では日々の飼育の実践の中で垣間見られる、彼らの「動物の幸せ」に関する考えを紹介する。

「みんなちがうからこそ考える、動物福祉への配慮のかたち」

山梨裕美（京都市動物園 生き物・学び・研究センター）

動物の心身の状態（動物福祉）への配慮は、動物園や水族館など、動物に関わるあらゆる場面で欠かせなくなった。科学的な根拠にもとづいた取組が基本となるが、その形は文化や環境など、さまざまな条件によって影響を受ける。そうした多様性は、それぞれの場所ならではの工夫を生み出す一方で、課題をより複雑にすることもある。本発表では、動物園・水族館における動物福祉の取組をいくつか紹介しながら、科学的な視点と文化的な視点の両面から、よりよい関わり方について考えていきたい。

「ネイチャーポジティブ時代の霊長類研究・動物園の役割」

深野祐也（千葉大学大学院 園芸学研究院）

ネイチャーポジティブという言葉が代表するように、ごく最近になって多くの企業が生物多様性に関心を持ち、取り組むようになった。その理由は、ビジネスが多種多様な生態系サービスの恩恵を受けており、この恩恵を持続的に享受するために、生物多様性に取り組む必要があるという認識と制度が広まってきたためである。動物園は直接的にはビジネスと接する機会は少ないが、大きなポテンシャルがあると考ええる。本講演では、この新しい潮流の中での霊長類研究・動物園が果たす役割に関する試論を述べ、みなさんと議論したい。

「マハレにおけるチンパンジー研究と〈エコ〉ツーリズム」

中村美知夫（京都大学大学院 理学研究科）

野生動物を対象とした観光は、本来「〈エコ〉ロジー」に十分な配慮をし、「見る」ことを「知って、変わる」ことに繋げるのが理想である。一方で、観光業は収益を求めるものでもあるため、常に顧客の満足や費用対効果といった「〈エコ〉ノミー」にまつわる問題も付随する。チンパンジーの長期調査地であるタンザニア、マハレ山塊でのチンパンジー観光の実態を紹介しつつ、こうした〈エコ〉ツーリズムの二面性について考える。

「ボノボとの出会いは保全意識を育むか？：保護区内外の中高生への調査から」

徳山奈帆子（中央大学 理工学部生命科学科）

野生動物を見ること、そして知ることは、その動物の保全によい影響をもたらすだろうか？コンゴ民主共和国ルオー学術保護区では、ボノボと地域の住民は同じ森を利用しており、両者の出会いが比較的高い頻度で発生する。ボノボについての知識や遭遇経験が、保全意識にどのような影響を及ぼすか検証するために、保護区内外の中高生を対象にアンケート調査を行った。本講演では、住民とボノボの遭遇事例やアンケートの結果から、大型類人猿と人の共存について考えたい。

ポスター発表リスト

場所：5 号館 3 階

N0.1~6: 5333 教室、7~12: 5334 教室、13~18: 5335 教室、19~24: 5336 教室

発表コアタイム 15:30-16:30 奇数番号 16:30-17:30 偶数番号

No.	代表発表者	代表発表者所属	演題
1	土井雅文	ZooPortal	国内大型類人猿飼育の課題と改善への提言
2	早川卓志	北海道大学	大型類人猿における新規の種・亜種判定と血縁の解析
3	竹ノ下祐二	岡山理科大学理学部動物学科	日本に暮らす人々に野生大型類人猿保護を「自分ごと」として捉えてもらうには？
4	竹ノ下祐二	岡山理科大学理学部動物学科	予報: ガボン、ムカラバードゥ国立公園に生息するニシローランドゴリラにおける群れ内の個体間の活動の同調
5	櫻井ひかり	京都市動物園	ウガンダ生息地研修の報告
6	久川智恵美	わんぱくこうちアニマルランド	チンパンジータローの歴史とチンパンジー飼育方法の変遷
7	佐竹まどか	日本クレア株式会社	ヤクシマザルの登攀・下降運動時の姿勢と利用する支持体の選好
8	島田将喜	帝京科学大学	野生チンパンジーにおける直腸脱の症例
9	立河龍利	日本大学薬学部大学院 薬学研究科 病原微生物学研究室	オナガザル科とテナガザル科の耳垢から分離された Malassezia japonica
10	赤見理恵	公益財団法人日本モンキーセンター	「世界ニホンザルの日」4年間の成果と課題
11	渡邊心葉	中央大学附属高等学校	ムササビの体内時計を調べる
12	林 美里	中部学院大学教育学部子ども教育学科	中部学院大学における日本モンキーセンターを活用した環境教育実践
13	冠 舞衣	中央大学理工学部生命科学科 動物行動生態学研究室	フラミンゴの休息姿勢における環境要因の影響
14	田中正之	京都市動物園	京都市動物園の「ゴリラのお勉強」：これまでとこれから
15	水野慧	中央大学理工学部生命科学科	多摩動物公園のチンパンジーにおける離別時間が挨拶行動に与える影響
16	中村千晶	日本歯科大学生命歯学部病理学講座／ 日本オランウータン・リサーチセンター	ボルネオオランウータン (<i>Pongo pygmaeus</i>) の喉頭の形態解析～フランジオスとオトナメスの標本比較
17	松本夏奈	秋田県立大学	秋田市大森山動物園のホッキョクオオカミの開園時間中における行動配分と施設利用
18	笹岡孝太郎	秋田県立大学	行動観察による秋田市大森山動物園のアミメキリンの異常行動についての検討
19	永井亮輔	大阪大学大学院 人間科学研究科	来園者数の増減が天王寺動物園のチンパンジーにおける社会行動に及ぼす影響
20	武田康祐	京都大学野生動物研究センター／ 公益財団法人日本モンキーセンター	大型類人猿情報ネットワーク (GAIN) を介した類人猿の非侵襲的試料の研究成果について
21	綿貫 宏史朗	公益財団法人日本モンキーセンター	欧州の動物園におけるニシゴリラの混合飼育7事例
22	五百部裕	相山女学園大学	鹿児島県トカラ列島口之島の野生化牛生息域の環境変化
23	南川未来	京都大学大学院理学研究科	環境要因が宿主の種よりも腸内細菌叢に強く影響する－ イワンザルとニホンザルの比較研究－
24	山梨裕美	京都市動物園	動物園・水族館のアニマルウェルフェアに関するリーフレットの作成

●新規発表 ●既発表

ポスター発表要旨

●新規発表 ●既発表

01●国内大型類人猿飼育の課題と改善への提言

土井雅文¹、中根立惺^{1,2} (1 ZooPortal, 2 北里大学)

準間接飼育への移行により飼育員の安全性は向上したが、ベテラン飼育員が持つ「暗黙知」の継承が困難となった。欧米マニュアルの画一的適用では、国内の飼育個体の生い立ちや飼育施設の環境では、柔軟に対応できない。栄養管理は改善されたものの、心理的ケアや行動管理は課題が残る。科学的手法と経験知を融合した「ハイブリッド型飼育文化」への転換と、組織的支援体制の構築が急務である。

02●大型類人猿における新規の種・亜種判定と血縁の解析

早川卓志、北山遼 (北海道大学)

大型類人猿の種レベル・亜種レベルの分類の再編成により、飼育個体の遺伝的背景について正確な判定が求められている。しかし複数世代を飼育下で重ねた個体が、雑種であるかどうかについて精密な解析が従来手法ではできないという問題があった。エクソーム解析という新規手法を用いて、この課題を克服できたので報告する。この手法は侵襲性の低い試料である毛根や糞便の DNA においても適用可能であり、血縁解析にも応用できる。

03●日本に暮らす人々に野生大型類人猿保護を「自分ごと」として捉えてもらうには？

竹ノ下祐二、本池幹太、堀結唯花、藤田実桜、中村隆聖、富永凌生、桑原妃那、河原優介、村上貴弘 (岡山理科大学)

日本に暮らす多くの人々にとって大型類人猿は遠い存在だが、かれらの保護には日本の人が自分たちの生活が遠隔地の生態系に与える影響を理解し「自分ごと」として意識することが不可欠である。本研究では大学院授業で議論を行い、行動を強制せず選択肢を示すこと、ターゲットごとにメッセージを変えることが鍵であると認識した。また、マスメディアやオープン SNS による情報発信よりクローズドで小規模なネットワークの活用が効果的であると考えた。

04●予報: ガボン、ムカラバ-ドゥドゥ国立公園に生息するニシローランドゴリラにおける群れ内の個体間の活動の同調

竹ノ下祐二¹, EBANG-ELLA, Ghislain Wilfried², 田村大也³, 藤田志歩⁴, AKOMO-OKOUÉ, Etienne François² (1 岡山理科大学理学部動物学科, 2 ガボン熱帯生態学研

研究所, 3 京都大・理, 4 鹿児島大・共通教育)

ガボン共和国ムカラバ-ドゥドゥ国立公園において、人づけされた群れを対象に、シルバーバック 1 頭および授乳中のオトナメス 2 頭の活動を記録し、活動同調の程度を分析した。結果として、ゴリラの活動同調コストはメス間よりもシルバーバックとメスの間でより高いこと、シルバーバックとメスは同時に異なる食物を採食することで同調コストを緩和していることが示唆された。

05●ウガンダ生息地研修の報告

櫻井ひかり¹, 新美圭汰¹, 山梨裕美¹, 徳山奈帆子² (1 京都市動物園, 2 中央大学)

2025 年 8 月 14 日～27 日にウガンダ共和国を訪問し、ウガンダ野生生物保全教育センター、ンガンバ島チンパンジーサンクチュアリおよびチンパンジーやショウガラゴなどの野生生息地であるカリンズ森林保護区を視察した。今回はウガンダ生息地研修で学んだことを紹介する。今後、この経験を飼育管理や動物園での教育普及活動に活かすための方法を考えていきたい。

06●チンパンジータローの歴史とチンパンジー飼育方法の変遷

久川智恵美, 大地博史, 門谷真奈 (わんぱーくこうちアニマルランド)

今年、推定 62 歳となったチンパンジーのタローは 1964 年に来日した。当初は船員の家で飼われ、次に東京都多摩動物公園でショーに出演し、その後高知にやってきた。タローの人生を追うと、チンパンジーの飼育方法が歴史とともに変化してきたことがわかる。「ペアではなく群れで飼育する。複雄複雌群で飼育する。生まれた子の移動は野生と同じようにメスで行う」などである。移り変わりを紹介する。

07●ヤクシマザルの登攀・下降運動時の姿勢と利用する支持体の選好

佐竹まどか¹, 半谷吾郎², 青山真人³ (1 日本クレア株式会社, 2 京都大学生態学研究センター, 3 宇都宮大学 地域創生科学研究科)

本研究では、ヤクシマザルの登攀および下降時における姿勢と支持体利用の特徴を野生下および飼育下で比較した。観察の結果、野生下では多様な支持体を利用し、6 種類の姿勢タイプが確認された。一方、飼育下では 7 種類の姿勢タイプがみられ、そのうち 1 タイプは飼育下特有であった。これらの結果から、ヤクシマザルは環境に応じて支持体利用を柔軟に変化させており、環境に応じた高い適応能力を有していることが示唆された。

08●野生チンパンジーにおける直腸脱の症例

島田将喜¹, 矢野航² (1 帝京科学大学, 2 防衛医大)

タンザニア・マハレの野生チンパンジーのワカモノオスにおいて、間欠的に自然還納

する完全直腸脱を観察した。最大約 10cm 脱出する患部には同心円状ひだと泥付着が認められ、姿勢を問わず脱出・還納し、排便は正常であった。直前に複数のオトナオスの攻撃により臀部に外傷を負ったことが確認されており、この外傷後の骨盤底筋群(肛門挙筋、肛門括約筋)不全が主機序であると推定された。

09●立河龍利¹, 綿貫宏史朗², 新宅勇太², 岡部直樹^{2,3}, 武田康祐^{2,3}, 廣瀬大¹ (1 日本大学薬学部大学院 薬学研究科 病原微生物学研究室, 2 公益財団法人 日本モンキーセンター, 3 京都大学野生動物研究センター)

オナガザル科とテナガザル科の耳垢から分離された *Malassezia japonica*

本研究では、非ヒト霊長類(NHPs)に定着する *Malassezia* 属を明らかにするため、オナガザル科およびテナガザル科に属する 18 頭の遺体から耳垢を採取し、分離培養および遺伝子解析を行った。その結果、10 頭の耳垢から *Malassezia japonica* が分離された。ヒト外耳道では主に *M. slooffiae* や *M. restricta* が検出されることから、NHPs では異なる共生関係の存在が示唆された。

10●「世界ニホンザルの日」4 年間の成果と課題

赤見理恵, 綿貫宏史朗, 辻内祐美, 荒木謙太, 高野智 (公益財団法人日本モンキーセンター)

12 月 3 日の「世界ニホンザルの日」について、4 年間の成果と課題の抽出を目的に、X 上で「#世界ニホンザルの日」がつけられたポストを分析した。発信者は、2021 年は動物園や動物園関係者がほとんどだったが多様化傾向がみられた。投稿された写真も飼育下のものから野生やグッズ等多様化した。動物芸や実験動物廃止に関するポストも見られるようになった。今後も動向を注視するとともに、海外への情報発信にも力を入れていきたい。

11●ムササビの体内時計を探る

渡邊心葉, 藤原悠太 (中央大学附属高等学校)

ムササビは夜行性の哺乳類で日没約 30 分後に活動を開始し日の出前に巣に戻る傾向がある。本研究では、ムササビの体内時計の周期、調節のしくみを明らかにするため保護個体 2 匹を常暗下および人工明暗条件下で飼育し、活動時刻を分析した。結果、体内時計の周期は 24 時間よりやや長く、明暗条件下では活動開始が暗期に同調した。また野生個体の観察から日没前の照度が出巣時刻に影響し、光が出巣時刻を補正すると示唆された。

12●中部学院大学における日本モンキーセンターを活用した環境教育実践

林美里, 梅田裕介 (中部学院大学教育学部子ども教育学科)

中部学院大学は2024年度から、(公財)日本モンキーセンター(JMC)の大学等賛助会員となり、環境教育実践をおこなっている。特に教育学部の幼稚園教諭・保育士コースでは、ほぼ全ての学生が複数回JMCを訪問する。初年次には、6種類のテーマを選び事前学習と園内での活動をおこない、事後学習として報告スライドにまとめ発表する。2年次には、比較認知発達論の講義と連動させて行動観察実習をする。訪問前後の意識調査結果も報告する。

13●フラミンゴの休息姿勢における環境要因の影響

冠舞衣, 徳山奈帆子 (中央大学理工学部生命科学科)

フラミンゴはその独特な一足休息姿勢で知られる。その機能としては体温調節が示唆されているが、検証は十分ではない。本研究では、多摩動物公園で飼育されているヨーロッパフラミンゴを対象に、スキャンサンプリング法を用いて休息行動(一足、二足、座位)を記録し、温度、水温、風速との関連を検討した。一足休息の割合は気温および風速と負の相関を示し、座位休憩の割合は風速と正の相関を示した。

14●京都市動物園の「ゴリラのお勉強」：これまでとこれから

田中正之¹, 吉田信明² (1京都市動物園, 2京都高度技術研究所)

京都市動物園では、霊長類の知性を発揮する機会を作り、その様子を展示する「知性の展示」を2008年から行ってきた。ニシゴリラでは2014年から「ゴリラのお勉強」を開始。開始当初から当時2歳の子どもゴリラ「ゲンタロウ」がタッチパネルに反応し、その後数か月かかって両親に行動が伝播していった。ゲンタロウは2025年10月に移動したが、これまでの記録はHPやYouTubeで公開している。今後教育への活用を進めていく。

15●多摩動物公園のチンパンジーにおける離別時間が挨拶行動に与える影響

水野慧, 徳山奈帆子 (中央大学理工学部生命科学科)

離合集散社会をもつチンパンジーでは、出会いの際の挨拶が重要なコミュニケーションである。離別時間の長さは挨拶行動の起こりやすさに影響を与えられられるが、野生条件において個体同士の離別時間を測るのは困難である。本発表では、多摩動物公園において離合集散を模した形で飼育されているチンパンジー15頭を対象に、離別時間の長さが挨拶行動に与える影響を検討する研究の途中経過を報告する。

16●ボルネオオランウータン (*Pongo pygmaeus*) の喉頭の形態解析～フレンジオスとオトナメスの標本比較

中村千晶 (日本歯科大学生命歯学部病理学講座, 日本オランウータン・リサーチセンター)

喉頭は、咽頭と気管の間に位置し、呼吸・発声を担う器官である。喉頭内腔の両側に位置する声帯ヒダは、粘膜・靱帯・筋から構成され、振動して発声する。オランウータンは一般に発声が少ないが、フランジオスは発達した喉頭でロングコールと呼ばれる大きな声を発声する。この機序を解明するため、喉頭軟骨の位置調節に働く喉頭筋群に着目し、フランジオスとオトナメスの解剖学的特徴・差異を肉眼的に比較観察した結果を報告する。

17●秋田市大森山動物園のホッキョクオオカミの開園時間中における行動配分と施設利用

松本夏奈, 村松明穂（秋田県立大学）

飼育動物に対して動物福祉に配慮した飼育環境を整えるべく、動物園や水族館では様々な環境エンリッチメントの取り組みが導入されているが、評価まで行えないことも多い。本研究の目的は、秋田市大森山動物園のホッキョクオオカミを対象とした基礎データの収集である。2025年7月から、開園時間中の屋外展示場での行動を観察し、スキャンサンプリングによって1分毎の瞬間サンプリングで記録している。現時点での分析結果を報告する。

18●行動観察による秋田市大森山動物園のアミメキリンの異常行動についての検討 笹岡孝太郎, 村松明穂（秋田県立大学）

動物園の飼育個体では、しばしば常同行動や異常行動が観察される。本研究の目的は、「角当て」という異常行動を行っているアミメキリンの飼育個体（5歳、オス）と、その母親（20歳、メス）の行動を観察し、「角当て」の生起要因について検討することである。2025年7月から、開園時間中の屋外および屋内展示場での行動をスキャンサンプリングによって、1分毎の瞬間サンプリングで記録している。現時点での分析結果を報告する。

19●来園者数の増減が天王寺動物園のチンパンジーにおける社会行動に及ぼす影響 永井亮輔¹, 佐野祐介², 勝野吏子¹, 山田一憲¹（1 大阪大学大学院人間科学研究科, 2 天王寺動物園）

本研究は、天王寺動物園で飼育されるチンパンジー2群（成体オス2頭、成体メス7頭）を対象に、来園者数や展示環境（屋内・屋外）といった環境条件が、社会行動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。1分ごとのスキャンサンプリングで活動、近接関係、ビジランス、スクラッチ行動を記録し、同時に来園者数と来園者の声の有無を記録した。来園者数の増加がビジランス頻度や近接関係にどのように変化をもたらすかを中心に検討し、その結果を報告する。

20●大型類人猿情報ネットワーク（GAIN）を介した類人猿の非侵襲的試料の研究成果について

武田康祐^{1,2}、綿貫宏史朗²、平田聡¹（1 京都大学野生動物研究センター, 2 公益財団法人日本モンキーセンター）

2002 年度に事業を開始して以降、非侵襲的学術研究を推進する GAIN が関与した研究成果 102 件について、研究分野の傾向を分析した。成果数は年々増加傾向で、分野別には形態学が最も多く、次いで分子生物学が多かった。獣医学や細胞生物学など、今後新たな需要が見込まれる分野も明らかとなったため、幅広い分野で研究がされるように提供側・利用側双方への普及啓発活動を継続していきたい。

21●欧州の動物園におけるニシゴリラの混合飼育 7 事例

綿貫宏史朗¹、田中ちぐさ¹、阿野隆平¹、武田康祐^{1,2}（1 公益財団法人日本モンキーセンター, 2 京都大学野生動物研究センター）

動物園における適切な異種混合飼育は、展示効果の向上のみならず、飼育個体の社会的エンリッチメントや空間の有効活用などの意義がある。現在我が国ではゴリラの混合飼育事例はみられないが、今後検討すべき課題である。2016 年と 2023 年に欧州 5 か国でニシゴリラを飼育する 12 園を調査し、ゴリラの 15 放飼場のうち混合飼育を実施する 7 事例を確認した。ゴリラはハーレムまたはオス群で、混合動物はすべてオナガザル科のサル類であった。

22●鹿児島県トカラ列島口之島の野生化牛生息域の環境変化

五百部裕¹、清水彩花¹、齋藤美保²、花村俊吉²、印牧美佐生³、木村大治²（1 椋山女学園大学, 2 京都大学, 3 元家畜学研究所）

鹿児島県トカラ列島口之島の南部地域には、100 年以上にわたって人間の管理を受けずに生息してきた貴重な野生化牛個体群が存在する。木村と五百部は 1980 年代前半にこの個体群の調査を行ったが、その後この調査を中断した。そうした中 2022 年から調査を再開し、1980 年代と比較して彼らの生息域の植生や島民の土地利用に変化があることが明らかになってきた。そこで本発表ではこの環境変化の概要について報告する。

23●環境要因が宿主の種よりも腸内細菌叢に強く影響する－タイワンザルとニホンザルの比較研究－

南川未来¹、リーワンイ²、半谷吾郎²（1 京都大学大学院理学研究科, 2 京都大学生態学研究センター）

タイワンザルの野生群・餌付け群・飼育群で糞便サンプルを採集し、近縁種ニホンザル（Lee et al. 2019）との比較により、宿主の種と環境要因が腸内細菌叢の形成に与

える影響を調べた。解析の結果、タイワンザルの腸内細菌叢はニホンザルに類似し、両種とも環境要因により組成が変化することが明らかになった。本研究は、近縁種レベルの遺伝的な差よりも、環境要因のほうが腸内細菌叢により強く影響することを示唆する。

24●動物園・水族館のアニマルウェルフェアに関するリーフレットの作成

山梨裕美¹、工藤宏美¹、安西航²・加古智哉²・柏木伸幸²、川瀬啓祐²、萩原慎太郎²、伴和幸²、一方井祐子³、大谷祐紀⁴、林美里⁵、東芝香織⁶（1 京都市動物園, 2 公益社団法人日本動物園水族館協会, 3 金沢大学, 4 北海道大学, 5 中部学院大学, 6）

動物園・水族館のアニマルウェルフェア（動物福祉）について、より多くの人に理解を深めてもらうことを目的に、紹介リーフレットを作成した。一般の方にもわかりやすい内容のものと、現場で働く実践者向けの2種類を用意し、公益社団法人日本動物園水族館協会のウェブサイトに掲載した。ポスターでは、作成の意図や内容について紹介する。